

受 賞 者 紹 介

<担い手育成部門>

かとう ひろゆき
加藤 廣行

<技術改善部門>

ふじい たかし
藤井 隆志

<農業・農村振興部門>

さいばい
モモ 栽培 サポータークラブ

<農業教育・技術者部門>

さかぐち たくじ
坂口 卓司

担い手育成部門



一宮市
加藤廣行

加藤氏は、一宮市の露地野菜農家に生まれ、愛知県追進営農大学校（現：愛知県立農業大学校）を卒業し、昭和49年に20歳で就農、同時に施設ナス栽培を新たに始めた。年間を通じて安定して出荷できるよう、加藤氏が中心となって、平成13年から地域の施設ナス若手農家と露地ナス栽培も始め、平成21年3月にはJA愛知西夏秋なす部会（以後、夏秋なす部会と記載）を設立した。現在は、施設ナス21a露地ナス10aを労力2名で経営する認定農業者である。

JA愛知西と一宮市、稲沢市で主催する「はつらつ農業塾」の担い手育成コースの塾生が、農家のほ場で研修を行う際の受け入れ農家を平成26年当初から担当している。令和5年までに計7名の研修生を積極的に受け入れて指導し、7名が夏秋なす部会に加入した。また、定年退職するJA職員や新規就農希望者の相談に乗り、露地ナスの栽培と夏秋なす部会への加入を後押しし、4名が露地ナス栽培を開始し、夏秋なす部会に加入した。現在、夏秋なす部会員は24名であるが、その内の11名は加藤氏が直接育成・加入に関わった人物である。加藤氏は研修生らが部会に加入後も、精力的に栽培のサポートを続け、夏秋なす部会の更なる発展に向けて尽力している。

加藤氏は愛知県立農業大学校の1年生の農家派遣実習の受け入れにも協力的で、令和5年度までに9名の実習生を受け入れている。卒業後の進路は農業関係団体への就職や農業法人への雇用就農等、様々であるが、地域の農業に携わる人材を育成してきた。また、市内の中島小学校や萩原小学校の小学3年生80人ほどが、野外学習として加藤氏のほ場に農業体験に来ており、地域への貢献も大きい。

加藤氏が中心となって年間通じてナスが出荷できるよう露地ナス栽培を始め、夏秋なす部会を立ち上げた。研修生を積極的に受け入れ、熱意をもって指導し就農へと導き、研修中のみならず就農後までサポートに尽力したことで、多くの研修修了者は一宮市、稲沢市に就農し、夏秋なす部会の一員として、部会長を務める者や単収が部会上位の者など、部会の主要な担い手として活躍している。加藤氏の取り組みによって、地域の農業振興と同時に新規就農者の重要な受け皿ができつつある。

以上のように、加藤氏は地域のナス産地の発展のために尽力してきた功労者で、地域の農業者や関係機関からの信頼も厚い。加藤氏の優れた指導力は、一宮市、稲沢市の農業の振興・発展に大きく貢献し、その功績は極めて大きい。

技術改善部門



田原市

藤井隆志

藤井氏は、グロリオサ専作農家として年収 1,800 万円の農業所得を実現する地域屈指の有力経営者である。現在は 8 棟 3,560 m²のハウスで栽培を行っており、栽培圃場を 15 の区画に分け、作付け時期をずらすことで、労働ピークを発生させず、母と 2 人で周年で安定した出荷を実現している。藤井氏は、高品質な花を安定して出荷できるように、厳しい目で球根の選別をし、揃いを良くするための「品質統一」の作業を継続して行ってきた。品質にこだわり、栽培体系を確立させたことで藤井氏がつくる花は高い単価で取引されるようになり、就農時と比べ出荷額は約 3 倍に増加した。

藤井氏は、JA 愛知みなみグロリオサ出荷連合（以下、部会と記載）に所属し、年間約 12 万本のグロリオサを栽培、出荷する傍ら、オリジナル品種の育成にも力を入れており、地域ブランドとして新たな需要拡大に向けた取り組みを積極的に行っている。

藤井氏が自ら育成したオリジナル品種「ZEN」は、平成 18 年の交配からスタートし 10 年の歳月をかけ選別と品質統一を進めて開発されたオレンジ色の花卉の中輪品種であり、これまで市場に出回っていない全く新しい形質の花である。「ZEN」は、2022 年国際園芸博覧会（フロリアード 2022）で高い評価を得て最高位の金賞を受賞し、高い注目を浴びて国内外からの需要の増加につながった。博覧会へ出品して評価を得ることはブランド力の向上につながるため、今後も積極的に出品し、国内外問わず、注目されるようアピールし続けていきたいと考えている。

藤井氏は、グロリオサの PR 活動にも積極的に取り組み、部会の先頭に立って観光地にグロリオサの花の展示を企画するなど、グロリオサの知名度向上に向けた活動を行っている。また、地域貢献活動として、田原市内の小中学校を対象とした花育活動に参画している。

部会では、輸出にも力を入れており、令和 5 年度の輸出量は約 78,000 本（全出荷量の 17%）、輸出金額は約 2,300 万円（全出荷額の 25%）である。輸出で評価を得るためには、特徴のある高品質な花を継続して供給していく必要がある。藤井氏は「ZEN」を始め、6 品種を継続的・安定的に出荷しており、部会の輸出事業を牽引している。

こうした前向きな姿勢や部会全体で向上していきたいという強い思いが高く評価されており、次代のグロリオサ生産を担う地域リーダーとして期待を集めている。

農業・農村振興部門



春日井市、小牧市
モモ栽培サポータークラブ

春日井市、小牧市は、名古屋市の北東部に位置しており、古くからのモモ産地であり、令和5年度は、面積46.6haでモモが栽培されている。しかし、大都市のベッドタウンとして都市化が進んでいるため、モモ農家の高齢化、後継者不足で、産地は栽培面積の縮小傾向が続いており問題となっていた。そのため、平成24年度からJA尾張中央が中心となって産地の縮小に対応するために、不足する労働力を確保する体制づくりに取り組んでいる。

課題を解決するため、モモ農家の作業を手助けできるボランティアを育成することを決定し、平成25年度に「モモ栽培サポーター養成講座」を開設、平成27年度には、「モモ栽培サポータークラブ」を設立し、平成28年度から援農を希望するモモ農家へ派遣を開始した。

当初は完全な無報酬であったが、無報酬では作業を頼みづらいという農家の声を受け、援農時間に応じて謝礼にモモを現物支給する方法を取り入れ、令和3年度からは、クラブ経験の長い人で事務局が実施する作業検定に合格した一定以上の技術のクラブ員による援農コントラクター※（作業請負）制度を導入して、援農支援制度の改善を図った結果、モモ農家への援農が拡大した。

モモ栽培サポータークラブが始まった平成27年4月の登録者は9名であったが、令和6年度には54名となった。援農コントラクターは令和3年度から19名で始まり、令和6年度には29名となった。援農コントラクター制度導入前のクラブ員活動延べ人数は、令和2年度は157人が最大であったが、令和3年の導入後は、令和3年度509人、令和4年度771人、令和5年度724人と大幅に増加し、令和6年度は8月現在で643人となっている。また、支援を受けたモモ農家数も、平成28年度5戸から令和6年度には16戸まで順調に拡大している。

令和5年度のモモ栽培サポータークラブによる支援時間から面積を換算すると、摘蓄作業12.2ha、予備摘果2.9ha、袋掛け3.1haをクラブ員が担っていることになる。モモ栽培サポータークラブの活動は、当地のモモ栽培振興に大きく貢献しており、その功績は極めて大きい。

※「コントラクター」とは、一般的に農業機械と労働力などを有して農家等から農作業を請け負う組織とされている。

農業教育・技術者部門



新城市

坂口卓司

坂口氏は、愛知県の農業高校教育の推進において、本県農業教育の科目「野菜」の教科指導の中心的な人物として活躍し、後進の指導に尽力した。また、全国の農業高校の先駆けとして複合環境制御温室の導入に尽力して、その栽培方法を確立した。そのため、実教出版「野菜」の教科書編集委員に選出され、将来の農業後継者育成に多大な影響を与えた。

愛知県高等学校農業教育振興会が行う農業高校生視察研修派遣事業では、副団長として研修の実務を行い、県内 10 校の農業関連高校の代表生徒を引率して、北海道での農家宿泊実習や視察研修を指導した。

農業教育共同実習所での勤務では、県内 10 校の農業関連高校の 2 年生に農業機械に関する実践的な教育を行い、将来の農業後継者に実用的な技術や安全意識を指導した。

校長在任時は、田口高校の校長として北設楽郡の連携型中高一貫教育における連携中学校の拡充に尽力し、北設楽郡全中学校との連携を果たした。また、安城農林高校では寮教育の充実を図り、さらに生徒の主体性を高めるために東京都立園芸高校との友好校締結に尽力した。

さらに、定年退職後の平成 29 年度より 5 年間、愛知県立農業大学校の学務科の再任用職員として勤め、学生の資質向上ならびに新規就農者の育成に尽力した。

科目「植物生理」を中心とした指導で、学生に実学としての農業を指導し、教諭時代に培った豊富な経験と知識を遺憾なく発揮した。中でも「わかる」講義をするために熱心に研究を重ね、学生と共に切磋琢磨できる環境を作り続けてきた。

農業大学校では今日までの 8 年間、非常勤職員としても継続的に勤務され、農業高校で培った学校運営力も駆使して農業後継者を育てることを主眼に置いた農業の技術指導に力を注いだ。その結果、卒業生の多くが県内全地域で農業者として活躍している。

このように、坂口氏は農業教育者として愛知県全体の農業の担い手育成に尽力し、その功績は極めて大きい。